

「模擬原爆投下の真相に迫るつどい」に参加して

高橋一郎（非核の会京都世話人、舞鶴市在住）

模擬原爆投下70周年・原爆投下直前のパンプキン爆弾投下の真相に迫るつどい（非核の会大阪主催 7月18日）に、該当地域として参加の要請を受け参加しました。米国のこの計画を米国公文書館公開文書からこの事実を発見し、全国に発信した春日井市など10地域の代表が招待され講演後のシンポジウムで発信・交流しました。テレビ局2局が取材、新聞記者も取材にあたっていました。会場のドーンセンター会議室には、レモン色をしたパンプキン爆弾の実物大模型（大津市歴史資料館所蔵）が展示されていました。接地後確実に爆発するための瞬発信管が3つ缶詰のような形をして頭部から突き出ていました。

講演された工藤洋三（工学博士）氏は、マンハッタン計画の重要な部分としてこれら一連の作戦が、原爆投下を唯一成功させるためのトルーマン大統領のトップシークレットとトップシークレットの下、大規模群団の編成で、ティニアン島をベース基地にして遂行、実行されたことを指摘しました。極秘の中で原爆投下を成功させるために期限を短期に限定し、訓練投下目標の選定でも原爆の効果を知るため空襲を受けていない都市を選定し、真のターゲットもその中にまぎれ込ませて、空襲を避けておくように事前に通告するという念の入ったものであったこと。京都市はその最適地とされていたものの、投下を前にして、急処除外されるという経過も知ることができました。

すべての計画と訓練が広島、長崎の悲劇のために周到に準備され、非人間的なこれらの計画が冷酷かつ科学的に進められたことに憤りを抑えることができません。この訓練では、日本の44都市に49発が敗戦の年の7月20日から、8月14日までの短時日に強行されています。中でも舞鶴はその被害が最大であったことも衝撃の1つでした。

70年前のこの計画が現在の米軍核戦略に引き継がれていることが推測されます。敗戦直後には、爆撃調査のために日本に進駐した調査団は1,000名を超えており、広島、長崎に原爆を投下したクルーの一員は、被爆地確認のためとして長崎に入っていたことも憤りを抑えることのできないものでした。

つどいの終了後、主催者の事務局からは、当該地域の交流会を今後も継続していこうではないかとの口頭による提案がありました。

舞鶴においても、7・29～30の舞鶴空襲の被爆の事実を悼み、平和を願う世論を広げることとともに、原爆投下のために極秘かつ大規模な構想の重要な部分であったことを深めることの大切さも感じさせられたつどいでした。

以上